報 告

情報処理学会第53回全国大会を終えて

―新しい全国大会のあり方を模索して―

第53回全国大会プログラム委員会

全国大会のプログラムは，第52回全国大会からその構成方法を改めて独自の委員会を設け，それぞれの大会にふさわしい企画を行うことになった．

第52回大会は稲垣康善プログラム委員長（名古屋大学）の下で行われた．この大会では，一般講演に加えて，新たにインダストリアル・セッションと研究会活動からの寄与としてのシンポジウムが7件行われた．しかし，新しいプログラム委員会制度に移行した直後でもあったために期間の余裕がなく，これ以上の新しい試みを取り入れることができなかった．

第53回大会のプログラム委員会は，大会期日の約11カ月前に発足できたので，第52回大会に比べて，イベントを企画する時間があった．

本53回大会においては，大会スローガンの設定，大会キーワードの改訂，デモセッションの開設，論文集のCD-ROM出版，公開セッションのインターネットへの放送を新たに行った．また，第52回大会で行われたシンポジウムも継続して行った．概して言わせていただけるならば，今回のプログラムは優という点がいただけるものと自己評価している．以下，その成果の概要を述べる．

第1は，大会スローガンを設定して，各種の企画の基本的なコンセプトを統一したことである．スローガンは，グローバル・ネットワーク社会への貢献―新しい情報処理技術の確立を目指して―というものであり，情報化社会への転換期にふさわしいスローガンであったと自負している．

このスローガンに基づいて，3件の招待講演と2件のパネル討論を企画した．招待講演は，日本サン・マイクロシステムズ（株）社長のビューリ（Jay K. Puri）氏，山梨大学の林英輔教授，（株）アプリックス社社長の郡山龍氏にお願いした．それぞれの講演の主題は現在のネットワーク社会において最も注目を集めているものばかりであり，大きな教室がほぼ一杯になるくらいの盛況となり，聴衆の期待どおりのものであった．

パネル討論は，同じ時間帯に7つものセッションが同時に開催されていたために，参加者数は招待講演ほどではなかったが，パネリストと参加者との間で，熱心な討論が行われた．

スローガンに基づいたこれらの企画は，期待どおりのものであったと評価している．

公開セッションのインターネットへの放送は，最近開催されたいくつかの学会などでも行われ始めており，新しいメディアを通じた一般への情報発信手段として，今後積極的に活用していくべきものであるとみなされている．この放送を受信していた者は，Mboneシステムがまだ一般的ではないものの，全国的に約30人以上を数え，積極的な評価を受けている．現状では，インターネットの回線のバンド幅が十分でないので，放送の品質に不満が残るが，同時に中継されたATM実験網のOLUネットで良好な品質であったという報告を得ている．

第2に，プログラム編成のためのキーワードを，第52回大会委員会からの申し送り事項に従い，従来採用していた論文誌のキーワードに依ることを止めて，研究会の分野を基本としたものに改訂した．今回のキーワードには，さらに大会のスローガンを考慮して，グローバル・ネットワークを加え，プログラムを編成した．プログラム編成にあたっては，関連するセッションが重なったり，飛び飛びの時間帯に設定されたりすることがないように，講演応募の状況に従いあらかじめセッションの群を構成しておき細部のプログラムを構成した．幸いに，大阪工業大学においては教室をゆったりと使わせていただけたので，無理のないプログラムを組むことができた．この点からも，一般の評判はよかったようである．

第3に，従来の大会での一般講演が，発表者か

らの一方的な短時間の発表に留まっていたものを改めるために，比較的長い時間を提供して，実際に構成したシステムなどのデモンストレーションを行い，いっそう議論が深められるようなデモセッションを企画した．時間と設備との関係から，デモセッションでの発表件数は，制限せざるを得ないが，今回は27件の応募があり，適正数と判断して，すべて発表していただいた．一部では，やや苦しい運営を迫られたが，期待どおり発表者と参加者との間で積極的な討議が行われており，同じ分野で研究している者同士の連帯感の芽生えのようなものも感じられた点で，大きな成功であったと考えている．デモセッションは，ポスターセッション形式から一般講演形式まで，種々考えられるが，今回は一般講演形式に加えて，セッション時間の後でポスターセッション形式の討議が続けられるように，教室と時間の配分を試みた．発表者や参加者からはさらに改善すべき点などについてご要望などをいただいているが，何分初めての経験でもあり，理想的にとはいかなかった点も残っているので，今後さらに検討を加える必要がある．

第4に，論文集をCD-ROMでも出版することにした．マルチメディア出版が本格的に行われようとしている一般的な状況で，情報処理学会の全国大会や各種研究会の文書電子化を促進させることが早期に必要であると認識して，今回の大会でも実施をはかったのである．出版に関しては，大日本印刷（株）殿のご協力を得て，短時間のうちに作成することができた．原稿がカメラレディ形式で提出されてくるので，これをスキャナで入力することと，適当なインデックスを作ることがポイントである．スキャナでの入力の問題点は，適切な分解能とデジタル化のためのしきい値の選択およびエッジ強調やノイズ除去処理などにある．できあがりは原稿の品質からみてもほぼ満足できるものであると考えている．なお，インデックスは，従来の目次に若干のリンクを加えて，HTML形式で作成し，ブラウザはインターネットのブラウザをそのまま利用することとして，ソフトウェアに関する経費を不要とした．今後，ネットワークを介する原稿応募方法などとも関連して，文字コードによる出版が問題になるものと思われる．また，紙出版との重複も検討が必要である．今回の出版は事前の周知が徹底しなかったこともあり，大量の在庫を抱える結果となったことが悔やまれるが，分厚い紙の論文集とは異なり保管場所をとらず，会社や図書館などの公共の場所でも利用には最適であると思われるので，大会の後でも相当数のCD-ROMがさばけるものと期待している．

今回の大会は，開学間もない大阪府枚方市の大阪工業大学をお借りして開催された．開学直後であり，教室の設備も真新しくてよく整備されており，使用できた教室数も十分であったので，プログラムを構成する上では大変好都合であった．また，参加者の休憩などにも，感じのよいロビーが開放された．さらに，大阪工業大学関係者で組織された現地実行委員会の方々の献身的なご支援をいただくことができた．このように，学会の開催に関しては万事が大変スムーズであった．唯一の難点をあげるとすれば，交通の便が悪くて行きにくいという先入観が邪魔したか，または土地勘がなくどのようにして行ったらよいのか分からないことが参加意欲を殺いだかもしれない点であった．

このようなプログラム構成の改革にも関わらず，第51回大会（富山）と比べて，一般講演が約110件減少し（815件），地方開催の大会としては，過去5年間の最低数となった．講演者を除く大会参加者は，地方大会としては，過去5年間で最高である（418人，総合計1,232人）のがなによりではあるが，論文集の売り上げも約1,000部減少している（1,418部）．これにCD-ROM（256部）を加えたとしても，やはり大きな減少であり，全国大会運営の経費の点からは大きな改善を迫られている．

地方大会への参加者の減少に関してはさまざまな原因が考えられるが，阻害要因を1つずつ取り除くことによって健全な大会の運営がなされるように願ってやまない．

本大会のプログラムの構成と実施は，大会プログラム委員会，現地実行委員会（委員長松本吉弘大阪工業大学教授）および全国大会組織委員会の委員各位，ならびに情報処理学会事務局員各位のご尽力に依るものである．深甚の謝意を表する次第である．

（平成8年11月5日　プログラム委員長　池田克夫）